Title：教団新報4832 33最終.eca Page:1 Date: 2015/12/22 Tue 11:37:40



# 教団新報

定　価　1部144円（本体133円〒共206円）
予約購読料　1年分　〒共　5,150円
紙代のみ　3,600円
振替 00140―9―145275
本紙を購読ご希望の方は、前金をそえて、お近くのキリスト教書店へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所　日本基督教団
169-0051　東京都新宿区西早稲田2-3-18
一時移転先　169-0072　東京都新宿区大久保1-7-18
電話03（3202）0546、FAX03（3207）3918
URL http://uccj.org
発行人　長崎哲夫
編集主筆　渡邊義彦
印刷所　株式会社きかんし

美竹教会（東京教区西南支区）

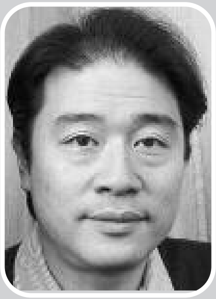
ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

《ルカによる福音書2章6～20節》

## クリスマスメッセージ

# 羊飼いの夜に

### ルカによる福音書2章6～20節



左近　豊

## 沈黙に押しつぶされそうな夜

クリスマスは招きです。全ての人がクリスマスの出来事へと招き入れられています。救い主の誕生を聞いた人たちは沢山いたことが聖書に記されています。ヘロデ王も、エルサレムの住人も、祭司長や律法学者たちもニュースは耳にしていたのです（マタイ2章）。「民全体に与えられる大きな喜び」が告げられ、また「地には平和」と言われていることからも、限られた、ごく一部の人たちだけがこの出来事に触れたのではなく、民全体、全地に向けて発信された喜びであった、と。

ほとんどが出来事を知っただけで終わりました。けれども、ある人たちは誕生の証人となり、救い主を礼拝し、出ていって証言し、語るものとなったことが記されています。野宿をしながら夜通し羊の群れの番をしていた羊飼いたちがそうであったと。存在の耐えがたい軽さに晒されて生きていたのです。発言は信用されず、語る言葉も額面通りには受け止められない。語っても通じぬ言葉を抱きしめて、交わりを絶たれて通わぬ命を引きずっていました。

挨拶を交わす程度の点のような交わりはあっても線となってつながることなく沈黙に沈んでいく。私たちを取り巻くネットが、網という意味でありながら、人と人の間、世代の間、家族の間、地域の間、国家の間、互いの間を結ぶはずの交わりとしての言葉は失われてしまっている現実に気付かされる時、羊飼いの置かれていた言語喪失状況は、他人事ではないと思わされます。私たち自身も、また羊飼いのように、舞台の袖の闇にたたずんでいることがある、と。

かつて私もその中に泊まり込んだ小児病棟での数か月間のこと。クリスマスが近づいて次第に光の彩りが増す街の中で、一生治る見込みのない脳性麻痺の女の子、抗がん剤治療で頭髪が抜け落ち苦しみ続ける白血病の高校生、やせ細った摂食障害の小学生、呼吸困難で苦しむ喘息の子、そのほか治る見込みのない病気の子らと親たちが規則的な機械の音と時折響く警告音の中を、昨日は今日と変わらないほど明日の事が心配で、クリスマスもお正月もただそういう名前の一日として過ぎていくしかない中にいる。それがどんなに心が凍えそうに、魂が凍てついてしまうものかを味わいました。世の巷のクリスマスのきらめきは残酷だなと思いました。

人々が寝静まった夜、おきだして徹夜の看病や親の介護をする者の、心がきしんで、思いが叫び出しそうで、魂からとめどなく涙が流れるほどの切なさに思いを寄せました。親しい友にも、尊敬する先生にも、時には親にも伝わらない闇に閉ざされた沈黙に押しつぶされそうな夜がある、と。

## 羊飼いたちの沈黙が破られる

羊飼いたちの夜、失われた交わりの深い闇夜に寄り添うように、疲れ果てた親の傍らで、誰からも出迎えられず、温かい産湯につかることもないまま、宿の外にしつらえられた客の乗ってきた馬やロバのための冷たい石の餌台の上に、ありあわせの布でくるまれて、寒く、暗い世界の片隅に、きらびやかな舞台の中心から遥かに離れた舞台袖の暗がりに、神の子は横たえられた。

讃美歌107番が「きらめくあかぼし、馬屋に照り、わびしき乾草、まぶねに散る。黄金のゆりかご、錦の産着ぞ、君にふさわしきを」と歌うたびに、情景が迫ってきて、なんと相応しくない仕方で相応しくない所にお生まれになったのか、たとえ誰の子であったとしても、余りにむごすぎると思わされます。けれどもこの世の惨さの極みを引き受けるためにキリストが来られた事が一層深く響いて魂を震わすのです。

羊飼いたちの夜に、沈黙の内に魂が血を滲ませるようにして耐えている「あなたがたのために、救い主がお生まれになった。この方こそ主、メシアである」と告げられる時、神の子に相応しくない仕方で、けれども羊飼いの闇を照らすに相応しくなられた救い主の姿を見るのです。パウロは「あなたがたは、わたしたちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです」と語ります（コリント二8・9）。

出口の見えないトンネルの中にたたずんでいる者の所へと、クリスマスなど関係がないと思っている人の所へとキリストがやってこられた。羊飼いたちの夜は照らされます。羊飼いたちの沈黙は破られます。出来事は言葉となってはじけだします。闇を主の栄光が照らし、沈黙の夜に突如讃美が響いた「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ」と。

舞台の袖の暗がりで、声を潜めていた羊飼いたちが、話し始めたことを聖書は聞き取っています。「天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、『さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか』と話し合」いながら、と。直訳すると「見よう、出来事となったこの言葉を」と。

聖書の世界では古より「言葉」が「出来事」を創り出すのです。世界は神の言葉によって創られ（創世記1章）、初めに言があった（ヨハネ1章）。言葉を見失っていた羊飼いたちが、救いの出来事となった言葉を見に出てゆく。

出来事となった言葉を見て、人の目を避けて町の外にいた羊飼いたちは町に入り、人々にその出来事、その言葉を知らせ始めました。暗闇に光がともったとき、羊飼いたちの言葉ははじけ出しました。ずっとずっと語り続けたのだと思います。たとえ皆から不思議に思われようとも、証し続けたのだと。舞台の袖から語り出された出来事が、聖書にこうして書き残されるほどなのですから。

羊飼いたちは、はじけ出る言葉で神を崇め、賛美しながら帰って行った。帰って行く場所は同じでも、羊飼いは消えることのない灯を抱えて帰って行った。相変わらず寒いままでも、そこからは暗闇にいる人たちを照らす言葉がともっていた。舞い戻った舞台の袖に光はあたらなくても、そこから聞こえる讃美の歌声が慰めの調べを奏でていた。

出来事となった言葉。わたしたちはクリスマスにそれを聞くのです。羊飼いたちは舞台を去ります。けれども羊飼いの証言は、今なおクリスマスの喜びと共に響いています。現代の羊飼い、闇の中を歩むものを照らす光の言葉となって。

（美竹教会牧師）

### お知らせ

「教団新報」今号を4832・33合併号とし、次号は2016年1月30日に発行します。

なお、教団三局は12月24、25日、および12月29日から1月4日は休業、5日より通常業務となります。

総幹事　長崎哲夫

Title: 教団新報483233最終.eca Page: 2 Date: 2015/12/22 Tue 11:37:44

上：浜矩子氏による主題講演
下：在日本韓国ＹＭＣＡを会場に

# 「マイノリティ問題と宣教」国際会議開催

## 12項目にわたる共同声明を決議

「ヘイトスピーチをのりこえ、共生の天幕を広げよう」と、11月18日から21日にかけて、在日大韓基督教会主催、第3回「マイノリティ問題と宣教」国際会議が、教団やNCCなどが共催して、東京・在日本韓国ＹＭＣＡを会場に１３３名が参加して開催された。教団からは石橋秀雄議長を始め、約30名が参加した。

在日コリアンをはじめとするマイノリティ（社会的に弱い立場に置かれている少数者）に対する差別・排外主義的な主張や「死ね、殺せ」といった言葉によって人種的憎悪や民族差別を扇動して恐怖や苦痛を与え続けるヘイトスピーチ（憎悪表現・差別扇動）などが生み出され、放置されている日本の現状が特に問題とされた。

金性済在日大韓基督教会総会長による聖書研究では、①イスラエル共同体の中の「寄留者」（受け入れられ、保護されるべきよそ者）という存在と、②アブラハム、モーセ、またイスラエル自身を寄留者と見做す伝承とが挙げられ、創世記12章3節によって寄留者に対する歓待と敵意とが神の祝福と呪いとを分ける、寄留者はその社会の敵意を歓待に変えることによって祝福の源となる、と説いた。

丹羽雅雄弁護士の主題講演では、「ヘイトスピーチは歴史的に形成された構造的差別である」として、植民地支配責任と戦争責任、戦後責任という加害の歴史の抹消・歴史の修正と改ざんこそが、ヘイトスピーチを生み出す主な原因となっている。今日ほどアジアの人々との真の連帯と共同行動の質が問われる時代はない、と説いた。

2日目は6グループに分かれて、⑴ヘイトスピーチ・ゼノフォビア（偏見に基づく排外感情）の増大－移住女性とその子供たちの差別の経験（レニー・トレンティーノ氏）、⑵歴史修正主義－アイヌに対する攻撃（太田マルク氏）、⑶憲法改正・憲法９条－琉球・沖縄から問う（又吉京子氏）、⑷排外的ナショナリズムの危険性（宋恵淑氏）、⑸差別や憎悪の標的となっているマイノリティのトラウマと衝撃（東谷誠氏）、⑹教会は「癒しの共同体」になり得るのか（金迅野氏）、などの証言に聴き入った。

3日目は、差別に立ち向かう教会の具体例として、①世界教会協議会の人種差別およびその他の差別に対する取り組みから学べること、②ドイツからの観点と展望、③不正を正す者－米国教会の人種差別への取り組みに関する簡潔な調査、④心の嘆き－民主的な南アフリカの公正な共生社会を夢見て、の証言に全体として聴き入った。

これらに基づき、グループ討論・全体会で協議を重ね、最終日の全体会で、「はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（マタイ25・40）の御言葉に導かれて、共同声明が採択された。

神が寄留者（外国人／移民）の存在を通して私たちの内なる敵意の連鎖を断ち切り和解へと至る道を示されたこと、また寄留者を受け入れることと自らを寄留者として位置づけることは、恐れと怒りが平和的な共生への希望と変えられ、この世界に神の祝福が実現するために不可欠な事柄であることが確認された。

国連自由権規約委員会及び人種差別撤廃委員会の勧告に従い、「人種差別撤廃基本法」「外国人住民基本法」もしくはこれらと同等の効力を持ってヘイトスピーチなどの差別行為を違法化する国内法の整備を早急に実現すること等を日本政府に求めることなど、12項目が決議された。

10月にソウルで開催された日韓ＮＣＣ共同会議（石橋議長なども共に参加）に引き続き北東アジアの平和について考えさせられ、まずは教区総会議員に向けて議長と連名で毎年呼びかけている「外国人住民基本法制定のための署名」に一層力を尽くさねばならないことを痛感させられた会議であった。

（小橋孝一報／在日韓国朝鮮人連帯特設委員長・ＮＣＣ議長）

「マイノリティ問題と宣教」国際会議 ユースプログラム

## 青年の企画運営によるプログラム

在日大韓基督教会第３回「マイノリティ問題と宣教」国際会議、ユースプログラムが、２０１５年11月15日～17日に在日本韓国ＹＭＣＡに於いて開催された。この国際会議は約20年ぶりの開催である。世界的にもテロや難民の問題、また国内的にもヘイトスピーチなど差別の課題が未だ解決する見通しのつかない中で、世界の青年がキリストの名によって出会わされ、キリスト者としてこの課題を共有し、祈りとともに向き合い、主の導きによって解決への想いを新たにされる、そのような時となった。

韓国、フィリピン、カナダ、ドイツなどの各国より、国内からは在日大韓基督教会、日本基督教団、日本聖公会、日本バプテスト連盟、日本福音ルーテル教会、早稲田奉仕園、学生ＹＭＣＡ、ウェスレー財団、学生キリスト教友愛会（ＳＣＦ）などの各教派・団体から52名の参加者が与えられた。

15日夕刻、各国の青年らが在日本韓国ＹＭＣＡに集い、ぎこちない英語でのあいさつとともに、心から出会いを喜びその感謝を主に捧げる開会祈祷をもって「国際会議」は開催された。初日には演劇家・舞香さんによる、知里幸恵氏（『アイヌ神謡集』を著したアイヌ女性）を題材にした演劇を鑑賞した。その力強い演技に圧倒されつつ、アイヌの民としてキリスト者として女性として受ける差別の中で、その全てを大切に生きた19年間の短い命から多くを感じ、参加者それぞれが自らの歩みと重ね合わせる時となった。

2日目のフィールドワークでは墨田区の「東京朝鮮第五初中級学校」に赴き、日本におけるマイノリティの教育現場での想いと課題を校長先生からお聞きし、学校中の教室にも自由に入室が許され多くの子どもたちとともに授業を受けた。先生方と子どもたちの心からの歓迎、明るい挨拶、笑顔、グラウンドでは一緒にサッカーボールを追い、別れの時には見えなくなるまで窓から手を振り続けてくれた。差別という痛みの学びとともに、その中にあっての豊かな営みと、未来につながる子どもたちの存在に心打たれた。

その後、関東大震災における朝鮮人虐殺の現場において話を聞き、活動に参加している在日韓国朝鮮人の方の「自分の孫が、またあのような目に合わないように、過去を忘れないように活動している」との想いに、午前の子どもたちの笑顔が浮かんだ。

また、被差別部落地区における皮なめしの現場を体験し、その数百年続く差別の歴史の中に、人間のもつ大いなる罪性と主に在る平等の尊さを再確認させられる、そのような悔い改めと信仰を強める機会となった。

3日目の午前には各国の代表によるプレゼンテーションがあり、マイノリティとそこにある差別の課題と痛みを共に分かち、青年らが様々な違いの中にあって、互いに祈り合う時となった。難民問題、ＬＧＢＴ（セクシャル・マイノリティ）、そしてヘイトスピーチなど、各国の青年の発表に全員が耳を傾ける。特定の国のみならず、国を越えて抱えられているテーマであり、参加者一人一人が友の受ける差別、身近にある差別を感じることの出来る豊かな時間となった。

午後には在日大韓基督教会の信徒でありプロのミュージシャンの郭正勲さんのリードにより、グループごとにそれぞれが感じた想いを持ち寄り、一つのラップ（歌詞）を作り発表し合うという、国際的な青年プログラムらしいワークショップを行った。東京朝鮮第五初中級学校、関東大震災時の朝鮮人虐殺の現場、被差別部落地区にある皮なめしの現場、それらの中での人や出来事との出会いが歌の中にちりばめられた重々しいものであるにもかかわらず、主に在る青年の交わりとしての希望と明るさに満ちていた。また、在日朝鮮・韓国人として「子どもの頃は自分を隠し、〝普通〟になりたかった。〝普通〟にあこがれ続けた子ども時代だった」と、自らの歩みを歌の中で証した女性などには、会場からひときわ大きな拍手があり、「アーメン！」「ハレルヤ！」と主の支えと導きとに感謝をお返しするひと時となった。

朝夕の礼拝は各国の青年たちが受け持ち、ギターやピアノ、インターネット動画サイトやダンスを用いた若者らしい礼拝であった。聞きなれた讃美歌や聖書箇所を様々な言語で聞き、参加者の証しを交えるなど、多様性に満ちた祈りの時間を持つことができた。

様々な違いを喜び合う共生の祈りとともに一日が始まり、未だ課題多い自らとこの社会の中にあってもなお希望を与えてくださる主への感謝とともに一日を終える。そのような祈りに満ちた3日間となった。

最後に、この国際会議の実施にあたっては、企画運営・通訳に至るまで教派を超えた多くの青年たちが自らの手で作り上げたことこそが誇りであり希望だ。主により集められた青年たちのその出会いと体験とに感謝しつつ、彼らのこれからの歩みの上に、主の豊かなる祝福があるよう祈る。

（野田 沢報／ＳＣＦ主事、国際会議ユースプログラム企画委員）

Title: 教団新報483233最終.eca Page: 3 Date: 2015/12/22 Tue 11:37:49



◆東京教区・東支区　伊豆諸島伝道委員会◆

# 教区を越えて離島教会が交流

東京教区東支区・伊豆諸島伝道委員会（委員長・竹井真人波浮教会牧師）が11月10日に銀座教会にて行われた。今回は「伊豆諸島伝道と離島教会交流」を主題とし、教団伝道資金を活用して伊豆諸島以外の離島教会から代表者が出席する懇談会となった。

銀座教会を会場に島の教会が集う

出席者は、伊豆諸島にある三宅島伝道所、大島元村教会、波浮教会、新島教会、八丈島教会から11名の教職と信徒、東支区内の諸教会から30名、南支区内から3名、西南支区内から2名、北支区内から3名、千葉支区内から1名、さらに四国教区の多度津教会と内海教会、西中国教区の隠岐教会、関東教区の佐渡教会、沖縄教区の与那原教会、在日大韓基督教会の対馬伝道所の教職、信徒、在日大韓基督教会金柄鎬総幹事と合せて59名となった。

新島教会の小橋孝一牧師が開会説教「海の島々、地の果てから」（イザヤ書42章10～13節）の中で、本懇談会での交わりに他教区の離島教会を招くに至った経緯に触れ、離島教会間の交流が活性化すれば、それが教団全体、ひいては日本全体の伝道の力として跳ね返っていくと指摘し、足の裏が刺激されれば全身の健康が増進するさまにたとえた。

そして、預言者イザヤが「地の果て」と「海の島々」を同列に並べ、そこから光が射し歌声が響くと預言しているように、伝道がどんなに行き詰まったとしても、神は人間には最も可能性の見えない所からその行き詰まりを打破し始めていくと説いた。「焦らず、諦めず、主にある希望をもって」伝道を推進することは、どこの教会にもあてはまると括った。

続いて島嶼部の各教会から現状報告がなされ、島特有の土着の風習と厳しい環境の中であっても果敢に主日礼拝が守られている様子と諸課題が伝えられた。その後の懇談では、離島での葬儀の事情と実際が話題となり、教会で行うキリスト教式の葬儀における福音伝道の可能性について意見が交わされ、大野光信牧師（隠岐）による祈祷をもって閉会した。

島嶼部にある教会同士の交わりが新しい扉を開いていくという幻が示された伝道懇談会となった。

（伊藤英志報）

▼広報センター委員会▲

# 教団の広報部門の情報共有

11月6日、第3回広報センター委員会が教団会議室で開催され、委員長・長崎哲夫総幹事が開会祈祷を捧げた。出席者は同総幹事、大三島義孝（教団ホームページ）、渡邊義彦（教団新報）、真壁巌（救援対策本部広報）、林牧人（信徒の友誌編集長）、市川真紀（教団出版局、信徒の友誌）、川上善子書記（教団ニュースレター）で、教団の広報を担う部門の情報交換の場である。委員会は２００７年4月に再編再開され、教団新報編集委員会、教団ニュースレター編集委員会、教団ホームページ編集担当者と各担当幹事が、総幹事のもとに招集されて始まった。さらに東日本大震災後の２０１１年7月に救援対策本部広報担当者が、翌年10月からは教団出版局の局長並びに信徒の友誌担当者も加わった。

各部門は独自の媒体としての編集方針を持ち、購読形態や読者層、発行部数と発行間隔も異なるが、分かち合える諸課題がある。開催は不定期だが、東日本大震災後には、取材と発信すべき情報の共有と、適切な伝達方法を求めて、より密度濃く行われた。

昨今、重要性を増している問題の一つは、賛美歌の譜面をコピーして用いる場合、また公的な文章中に賛美歌の歌詞を転載・引用する際の、ＪＡＳＲＡＣその他の著作権に関する事項である。同じ賛美歌集の中でも個々の賛美歌によって判断が違う。各媒体が執筆者と事前に歌詞引用について打ち合わせる等の現状もある。教団出版局ホームページでは賛美歌の著作権について詳細な説明がなされているが、この事柄を各教会や関係者方と連帯して伝え、対応するために広報の展開が求められていよう。

また懇談での質問に答える形で、信徒の友誌内、「日毎の糧」の欄に登場する教会群の「位置情報」には、様々な意見が寄せられていることがわかった。市町村合併で地名が新しくなった地域も増えている。要望に応えつつ、教団に属する１７２０の教会の情報を皆で共有し祈るために、常に工夫することが求められている。

（川上善子報）

教育委員会

## 子供のため祈らねばならない

具志堅　篤

委員会コラム

「教師の友」に掲載される説教のためにテキスト黙想を作成する機会を持った。全国のＣＳの子供たち、奉仕者と諸教会を覚えつつである。委員が時間をかけて作成した黙想は直接、説教に反映されるかどうかは分からない。少なくとも、私たちの祈りが届くことを期待したい。

多くの物に囲まれ、多くの人に囲まれながらも空虚な思いに不安を抱く子供たちは少なくない。

教会は、この子供たちのために何が出来るのだろうか。主イエスは「子供たちをわたしのところに来させなさい」と言われた。主イエスこそは、子供たちの「居場所」だ。だから「神の国」には必ず子供たちがいるはずだ。それなのに教会に子供がいないとの報告を聞くのは何故か。

この夏、祖母の勧めで修養会に参加した中学生がいた。2泊3日の日程だが、半強制的だったので1泊だけとの条件付きの参加だった。

1日目が終わった。皆に見送られて彼は、駅に向った。何故か夜のプログラムに彼の姿があった。結局、最後まで参加した。訳を聞けば「そっちの方がめっちゃ楽しいから」とのことだった。主イエスが備えられる子供たちの「居場所」とはそういうところだ。勿論、その背後にその子の母親と祖母の祈りがあった。

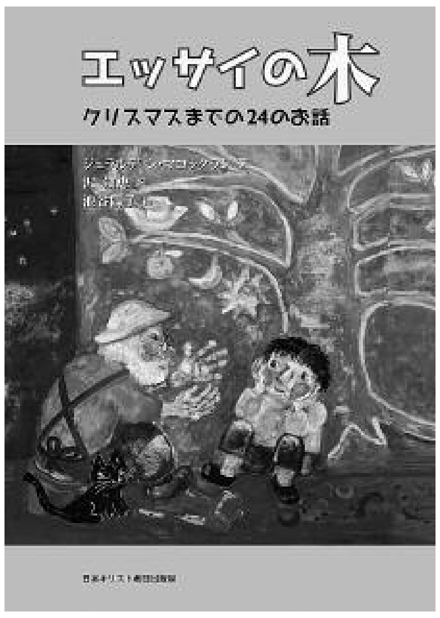
私たちは祈らねばならない。魂を注ぎ出すようにしてこの国の子供たちのために祈らねばならない。それが教団教育委員会の務めだと確信した次第である。

（教育委員長）

キリスト教本屋大賞 2015 大賞受賞記念

## 「エッサイの木　クリスマスまでの24のお話」

池谷陽子エプロンシアター　沢知恵ミニコンサート




児童作家ジェラルディン・マコックランさんの「エッサイの木」（２００３年に英国にて出版）を、昨年、シンガーソングライターである沢知恵さんが翻訳、絵本作家の池谷陽子さんが挿絵を添えて教団出版局から出版した。この児童書がキリスト教本屋大賞を受賞した。この大賞はキリスト教専門書店がこの1年に刊行された中から「売りたい本・お勧めの本」を投票で選ぶ。２０１５年で5回目。児童書、海外作家の受賞は初となる。

物語は、教会でエッサイの木を木彫りする大工のおじいさんが、教会を突然訪ねてきた男の子からせがまれて話しを聞かせることで進んでゆく。おじいさんが聞かせるのはエッサイの木に彫り進めてゆく創世記からはじまりキリスト誕生に至る24の聖書の出来事である。子供たちに届く言葉、物語を印象づける力強いスクラッチ画の挿絵を得て新たな本となっている。

大賞受賞を記念して11月23日、東京・洗足教会を会場に、池谷さんのエプロンシアター、沢さんのミニコンサートが行われた。池谷さんは身につけたエプロンをステージにして手作りの人形たちを使って「エッサイの木」のダイジェストを、沢さんはピアノ弾き語りでクリスマス讃美歌等、またシアターの場面に合わせたこどもさんびかや効果音を披露した。1時間15分ほど、ステージの前に陣取った小さな子供たちも多いに楽しんだ記念となる良いプログラムだった。

著者であるマコックランさんは「この24の物語を、アドベントに読むもよし、夏に木陰でゆっくり読むもよし」とはじめに記す。クリスマスにはもちろん、1年を通して、キリストがわたしたちのために生まれてくださった救いの歴史のつながりを子供たちと一緒に覚えるに良い本だ。

（新報編集部報）

「エッサイの木　クリスマスまでの24のお話」日本キリスト教団出版局◆Ａ５版上製・１５８頁・本体１８００円＋税。詳しくは、出版局ホームページ（http://bp-uccj.jp）で。

## 消息

飛田知恵子氏（隠退教師）

15年11月15日逝去、１０5歳。旧満州生まれ。31年柏木聖書学院卒業。72年より勝田教会を牧会し、79年に隠退。遺族は娘・二宮めぐみさん。

## 事務局報

**正教師登録**

鈴木道也、小島啓史

立花三世、西間木順

（２０１５・11・23受按）

**教師異動**

八郎潟辞（兼主）岡田恵美子

〃　辞（兼担）岡田いわお

〃　就（代）飯田啓子

蘇原　就（兼担）志村　真

宮田　辞（主）牧村元太郎

〃　就（代）牧村元太郎

福岡社家町辞（代）大島一利

〃　就（主）牧村元太郎

鴨方　辞（代）石川敬規

〃　就（兼主）石川敬規

**伝道所廃止**

只見

**伝道所所在地変更**

浪岡

〒038－１３１１　青森市浪岡大字浪岡字林本61－１

**お詫び・訂正**

新報４８３１号、３面「事務局報」欄、徳之島伝道所住所番地「９３７－１」を「９７３－１」にお詫びして訂正いたします。

Title: 教団新報4 83233最終.eca Page:4 Date: 2015/12/22 Tue 11:37:53



伝道報告

伝道のともしび TOMOSHIBI

七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。…イエスは言われた。「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」
ルカによる福音書第10章17節～20節

# 被災地のただ中にある教会として

常磐教会牧師　**明石　義信**

礼拝後、教会員と共に
前列左から2番目が筆者

常磐教会は、福島県いわき市の少し山よりの場所に位置し、常磐炭鉱に働く人々への伝道を使命として、職域伝道でたてられた教会です。炭鉱の閉山に伴う困窮の地域に保育園を創設したり、幼稚園を開園したり、地域との深いつながりを持つ歩みをしてきました。

東日本大震災で会堂が全壊し、3年間を、3キロほど離れた保育園で礼拝を続けてきました。そして、教団・教区と全国の様々な教会からの大きな支援を受け、昨年4月に献堂式をすることができました。会員12名の教会にしては立派すぎるかもしれない会堂ですが、被災し移住してきた人々の、絆作りの場として用いられています。暖かい木のぬくもりが、集まって話をする時に、住んでいた元の場所を思いおこさせ、安堵感を持つと言って下さいます。

「被災地」という言葉を聞いて、東日本大震災を指すという感覚は、もうなくなっているのかもしれません。その後に起きている大きな災害が、「被災地」を次々と作り出している現実があります。それでも東日本大震災は、その被害の規模と影響の大きさだけでは語り切れない状況が、今も続いています。放射性物質による汚染の被害は、原発からの距離や県境という物理的な区切りを超えて広がり、元の地域という枠組みを崩壊させ、住む場所を追われた人々を大勢生み出しました。

福島県内では、低線量地域と言われているいわき市域にある常磐教会は、福島第一原子力発電所から47キロの場所に位置していますが、原発事故当時は屋内退避の指示が出され、安定ヨウ素剤が配られたものの、服薬指示は出ませんでした。中途半端な状態に置かれている地域かもしれません。しかし、ここに住む人々は、特に子どもたちの未来に強く責任を感じます。子どもたちをむしばむ甲状腺がんが増えているのは何故か。将来、身体にどのような影響が出てくるのか。不安を持ちつつ生活せざるを得ない現状を見据えていかなければなりません。

私たちの教会は、会堂に東北へルプが母体となる食品放射能計測所を併設し、これから何を基準として避難し、どういう仕方で生活することがより安全なのかを、共に悩み、共に選択する重荷を負い続けていきたいと願っています。

被害の程度の違いはあっても、元の場所を奪われた喪失感を経験した教会員は、常磐教会の原点に立ち返って、被災してきた移住者や地域の人々を、隣人として歩む選択をしました。主によって種まかれて、「その場所に伝道し、実りを増やす使命」は十分に果たせてはいないかもしれませんが、主が、この場所に住む人々を見放してはいない事実を証ししていくことこそが、常磐教会の使命であると受け止めて、地域との関わりを大切にしていきたいと思っています。

## 厚生年金保険加入問い合わせ及び税務調査について

日本基督教団事務局より

昨今、日本年金機構より、厚生年金保険の加入について法人格のある宗教法人に「厚生年金保険の加入調査」という名目で、問い合わせがなされています。これは、「たとえ従業員が1名でも、法人格がある事業所は、厚生年金保険に加入する義務がある」という法令に基づいてです。

しかし、宗教法人の場合、代表役員である教会担任教師は、宗教法人と雇用契約を結ぶ関係とは異なる、という見解があります。

現在、東京都宗教連盟は、この問題について検討を開始しました。また、全日本仏教会（全仏会）は、厚生労働省に申し入れをして、「結論が出るまで、日本年金機構による強制加入促進は停止する」という協議を行うとの約束をとりつけています。

各宗教法人教会においては、このような調査や問い合わせがあっても、応じないように願います。「教団本部で検討されています」と答えるに留めて下さい。

併せて、税務署より、「税務調査」が以前より頻繁に行われているようです。調査理由は、「源泉徴収義務に関する調査」としています。宗教法人に行われる税務調査は、「任意調査」です。宗教法人の同意が必要です。「調査権」とは違います。

「信教の自由」（憲法20条、宗教法人法1条）「宗教上の特性習慣の尊重義務」（宗教法人法84条）が保障されなければ調査は出来ません。

このような調査は、各教会・伝道所にとって、想定外のことであり、安易に調査を受けて、思わぬ「追徴課税」を課せられることがあります（牧師館住居を諸手当と見なすなど）。

厚生年金に関する調査の問い合わせ及び税務調査があった場合、即断することなく、ご不明の場合は、教団事務局総務部までお問い合わせ下さい。

◎問い合わせ先　教団事務局総務部　TEL０３－３２０２－０５４１

## 「兵庫県南部大地震記念の日」追悼礼拝

◎日時　２０１６年1月17日（日）午後6時
◎場所　日本基督教団 神戸教会
（神戸市中央区花隈町９－16）
◎メッセージ
『関係』の中で問われ、心動かされて」
東島勇人さん（兵庫松本通教会）
◎主催・問合せ　日本基督教団兵庫教区
（TEL０７８－８５６－４１２７）

## ひととき

神吉　学さん

### 神の言葉を運ぶ

1968年年福岡生まれ、福岡育ち。地元で自動車の営業マンを経て現職。両親も周船寺教会員。

福岡市の中心、天神にほど近いところに九州キリスト教会館はある。3階には日本基督教団九州教区事務所が入る。1階に神吉さんの経営する「新生館」が店舗を構えている。新生館は西日本一円で放送伝道、文書伝道の活動をしていた西日本新生館の活動を引く継ぐ形で１９８４年に誕生した。２０００年、神吉さんが創業者から経営を引き継ぎ、今日に至る。

神吉さんは不思議な導きでキリスト教書店という、全く未知の分野へと飛び込んだ。

日中、新生館に立ち寄っても神吉さんの姿はほとんどない。朝、出勤すると、入荷品のチェックや、事務作業の後、パートさんと交代すると、書籍・グッズを車に積み込み、配達に出る。昼食は運転しながら摂ることになる。新生館の担うエリアはほぼ九州全域と広域だ。配達するエリアは福岡県内だが、各教会・幼稚園までの距離は長い。店舗に戻るのは夕方、閉店の少し前。そこからまた、事務作業が始まる。翌日の配達準備をすると夜遅くなることも多い。

神吉さんは所属する周船寺教会の子どもの教会リーダー、会報委員、そして長老でもある。日曜日は朝9時前には教会に来て、子どもの教会の準備を整える。礼拝後は役員会、会報委員会などが入る。

ここ数年は以前とは比べ物にならないぐらい書籍が売れなくなったと言う。出版業界の厳しい現状の中、キリスト教書店の現状はさらに厳しい。しかしそれでも神吉さんは今日も黙々と書籍の注文を受け、届いた書籍を届ける。教区・地区・諸教会の集会等で依頼があれば日曜・祝日も出張販売に出かけていく。

キリスト教書店もその地域に立ち、神の言葉を取り次いでいる。「特別なことはしていない」と神吉さんは言うが、文書伝道の業は貴い。信仰と祈りがその働きを支えている。

## 祈りが求められている

いろいろな関わりから、教会外で講演をすることがある。大学病院の倫理審査委員（外部委員）をしていることから、今年は、医療倫理に関して看護師の研修会で講演する機会が何度かあった。

6月に秋田県看護協会総会での特別講演をしたが、出席していた由利本荘看護学校の副校長先生から、10月に講演をしてほしいとの依頼を受けた。全学生対象の戴帽式記念講演とのことであった。

9月に入って、その副校長先生から電話があり、8月に一人の学生が自死したとのことを知らされた。学校でのいじめとかいうことではなく、その学生がいろいろなことで精神的に行き詰まってしまったようで…とのことであった。そして、「ついてはぜひ雲然先生にお祈りをしてほしい」と言われた。これにはいささか驚いた。たしかにキリスト教の牧師の肩書で講演に呼ばれているが、キリスト教主義でも何でもない学校でお祈りなどしてよいのだろうか、苦情が寄せられないだろうかなどと一瞬心配したが、分かりましたと答えた。

当日は、2時間の講演の最初に15分ほど時間を割き、聖書を読み、短く奨励をし、学生たちと共に祈った。その後、学校からは、大変感謝しているとのお手紙をいただいた。「祈りが求められている」と実感した出来事のひとつとなった。

ちなみに、6月の講演を聞いた看護師とそのお連れ合いがすぐに礼拝に通い始め、このクリスマスに洗礼を受ける。ここにも神さまがなさるお働きを見る思いでいる。

（教団総会書記　雲然俊美）